

神への節操

使徒たちを通して働く聖霊のめざましい働きは、エルサレムだけでなく、その近隣の町々や村々にまで伝えられ、一大霊的覚醒運動へと発展していった。その動きは人々に多大の感化を与え、人々はこの新しい群れの集まるエルサレム神殿のソロモンの回廊に殺到した。

そのことはユダヤ当局者たちを激怒させた。イエスの名によっていっさい語ってはならぬという彼らの宣教禁止命令にもかかわらず(4:17)、十字架にかけられた男をメシアと主張して民衆をまどわす使徒たちの、権威に対する不服従と異端的教えによる民衆騒乱の故に、彼らは使徒たちを逮捕し、再び議会権力をもって彼らを沈黙させようとした。

これに対してペトロをはじめ使徒たちは言った、「人間に従うより、神に従わなくてはなりません。わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自身に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証しておられます」(29:32節)。

権威による脅迫をも恐れないこの弟子たちを殺害しようとする議会の過激派の動きは、穏健派の律法学者ガマリエル¹の賢明な勧告によって、かろうじてとどめられたが、しかし、議会は、使徒たちを呼び入れて、鞭打った後、今後イエスの名によって語ることは相成らぬと厳しく命じた上、やっとのことで彼らを釈放した。

ルカはこう記している。「それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て来て、毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた」(41、42節)。

ユダヤ最高法院の権力による脅迫と迫害に対する使徒たちの毅然たる態度は、今日の私たちに対する信仰のチャレンジでもある。彼らは勇気の人、宗教的節操のある人たちであった。「節操」とは、いったん志(こころざし)をたてたらどんなことがあっても信念をかたく守って変えないことを意味する。

信仰とは神の恵みに生きることであるが、同時にそれは「神への節操」をつらぬくことでもある。すなわち、どんな犠牲を払っても、どんな状況の中にあっても、まず神を第1として生きることである。日々の生活の中で、何事をするにおいても、「今しようとしていることは、私のため(利益)になるか」ではなく、「神の御心にかなっているか、神の喜ばれることであるか」とたえず問いつつ、

神に従うことを選びとっていくことなのである。「人間に従うよりも、神にしたがわなくてはなりません」と語った使徒たちのように (29 節)。